

超次元ゲームネプ テューヌ XENOVERSEmk2

ヤサイ人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある世界に、歴史改変が起こり消滅しかけた世界があった。だが七個そろうと願いが叶う球によって召喚された一人のサイヤ人ブルー族、彼は歴史を守るタイムパトローラーとなり歴史改変を阻止し世界を救った。二十年後、やがて彼は一人の父となり息子がとある超重要任務についた事が始まり。またある世界で四つの国と四人の女神が納める世界があった、しかし犯罪組織と呼ばれる者たちにより崩壊寸前にまで追い込まれていた。何の関係も関わりもない二つの世界が関わったことから始まる

目次

プロローグ 関わる世界

英雄の息子、女神の妹、終りと始まり

1

新人タイムパトローラー、ゲームギョ

ウ界に参上!?

奪還の女神候補生

反省会 関わる世界編

キャラと設定

プラネテューヌ編

女神の起床

現状報告、打開策

リハビリ、遭遇

一時の休息

H O P E、ゲームキャラ

犯罪組織の刺客と異変

44

50

55

7

15

20

24

28

33

37

プロローグ 関わる世界

英雄の息子、女神の妹、終りと始まり

ゼノ世界

エイジ850、トキトキ都と呼ばれる世界でトランクスが集めたドラゴンボールによって召喚されたサイヤ人ブルー族ターニツプ、彼は歴史を守るタイムパトローラーとなり彼は歴史を守るタイムパトローラーとなり彼は歴史を修正しついに彼は歴史改変の真の黒幕、トキトキ都に住まう時間を司る聖鳥トキトキを吸収した魔神ドミグラを追い詰めた。しかしドミグラは自分の思い通りにならない歴史全てを消滅させるため時の巢にある刻蔵庫を破壊しようとするが、〃終りと始まりの書〃によって消滅寸前にまで時間を遡ったターニツプは次元の狭間に逃げ込んだドミグラとの最終決戦を挑んだ。

「ぐ、ぐぎぎぎぎぎぎ!!!」

「終わりだドミグラ、覚悟を決めろ」

力全てを出し異形の怪物へと姿を変えた傷だらけの魔神ドミグラ、超サイヤ人2へと

変身したターニップの戦いは決着がつこうとしていた。

「何故だ、何故攻撃が当たらない!? 7500万年貯め込んだ力の全てを開放したこの私
が何故あのサルを、腕力自慢だけのあのサルごときを何故倒せない!!」

「青い奴だ、セルがトランク스에言つた言葉を知らないのか? 貴様は全力を出すと言つ
ておきながらさらにパワーに頼つた変身をしただけだ。見る今の自分の姿を、そんなに
膨れ上がった体ではパワーは大きく上がってもスピードが殺されてしまう、だからお前
の攻撃は俺に当たらないんだ。パワーアップのためだけの変身では何も生み出せない、
今のお前なんかよりミラの方がまだ強かつたぞ!」

「くークソオオオオオオオオ!! サルが調子にのるなあああ!!!」

逆上したドミグラは己の全力を込め拳を突き出し突撃する、ターニップも己の全力を
両手に集めこの戦い最後の技を構えた。

「かゝ、めゝ、はゝ、めゝ、波ーっ!!」

「死ねえ、この虫けらあがああああああ!!!」

超かめはめ波とドミグラの拳がぶつかり合う、初めは互角だったが怒りに我を忘れた
ドミグラの拳がわずかに押し始めた。

「ぐぐぐぐぐ! (あきらめるな!)?」

ターニップの頭の中に声が響き力があふれ出す、後ろを見ると孫悟空、孫悟飯、ベジータ、ピッコロ、クリリン、歴史の達人、彼を鍛えた師匠、夢か幻か次元の狭間に来れる筈がない英雄達が気を送っていた。

(あと少しです、がんばってください！)

(まったく、なさない奴だ)

(ここまで来て負けることはゆるさんぞ)

(ここまで来ただけでも、スゲーけどな)

(爆発させろ!!!おめえの力全てを!!!)

「くたばれドミグラ!フルパワーだ!あああああ!!!」

「な、なんて奴だ・・・俺は・・・神に・・・神になった・はず・な・の・に・・・!?!」

悟空達の英霊が気を開放しターニップと一体化し、超特大のかめはめ波はドミグラを飲み込み細胞一つ残さず消滅した。ドミグラに吸収されたトキトキは救出されターニップと共に次元の狭間を脱出した。

四つの国と四人の女神が納めるゲームギョウ界 “ギョウカイ墓場” にて、紫の女神パープルハートの刃が走る、黒の女神ブラックハートの剣もそれを追い挟みこみ切りかかる。白の女神ホワイトハートと緑の女神グリーンハートは天を舞い、斧と槍はそれを穿つため突き進む。しかし四人の女神と対峙している一つの影、紅の女神は軽く身を流し先の二人の女神の攻撃をかわし、後の二人の女神の攻撃をその禍々しい大鎌で受け止める。

「はあ、はあ、．．．」

「この程度か、つまらぬ」

犯罪組織マジエコンヌと呼ばれる者たちにより、女神の力の源 “シエア” を奪われ本来の力を発揮できない女神達、しかし自分達の守る物のため女神は戦ったが、四対一の絶対有利で始まったこの戦いは紅の女神の圧倒的強さの前に歯が立たず終わってしまった。

「そんな．．．女神が．．．お姉ちゃん達がこうもあつさりと．．．」

地面に倒れた四人の女神を見つめることしかできないただ一人残ったパープルハートの妹パープルシスター、ネプギアは飛ぶことも忘れ地面に膝をついていた。そこへ紅の女神がゆっくりと近づいていく。

「お願い、やめて．．．このままじゃ．．．ゲームギョウ界が．．．」

絶望するネプギアは呟いた、しかし紅の女神の目は凍りつくほど冷たく手にした大鎌を振り上げ、それが振り下ろされる直前ネプギアは心の底から願った。

(お願い、誰か……助けて……！)

ゼノ世界

あれから二十年の時が過ぎた、トキトキ都はコントン都と改名され、英雄となったターニップは父となり、一人の息子を授かっていた。彼の名前はガーランド、父と同じくサイヤ人ブルー族として生を受け新人パトローラーとして働く彼に超重要任務が任せられた。

お願い……誰……助けて……！

「ん？」

不意にガーランドの耳に何かか聞こえた気がし周りを見渡す、しかし辺りに声を発したと思われる者はいなかった。

「気のせいかな？」

「どうしたの、ガーランド？」

「・・・いや、なんでもないさお袋。それじゃあ親父、お袋、行ってくる！」

母ロータスの一言に気のせいとかたずけた彼は、母と英雄である父のホログラムにあいさつし、時の巢を目指し走り出した。英雄によつて魔神が倒され物語が終わった世界、女神の敗北から物語が始まる世界、本来関わりのない二つの世界が関る物語はもうすぐ始まる。

新人タイムパトローラー、ゲームギョウ界に参上!!

ゼノ世界

「おお、やっと来おったか、落ちくたびれたぞい」

「待ってたわよ、ガーランド」

時の巢にある刻蔵庫にやって来たガーランドを迎えたのは超重要任務を伝えた老界王神、時の巢の主である時の界王神はさっそく黒いオーラに包まれた一つの『終りと始まりの書』を広げた。それには悟空の兄ラディッツが地球に襲来し、悟空とピッコロが二人がかりで挑んだ歴史が改変され、黒いオーラに包まれ目が赤くなったラディッツによつて二人はおろか悟空の息子、悟飯もやられていた歴史となっていた。

「この歴史は本来、悟空の捨て身の作戦でピッコロがラディッツを倒すんじやが・・・」
「歴史の改編でラディッツが悟空君達を返り討ちにしちゃってるようね、これを元に戻すのがあなたの超重要任務として初仕事よ。がんばってね」

「分かった、それじゃあ行ってくる」

時の界王神は『終りと始まりの書』をガーランドに渡し健闘を祈っていると伝えた。

ガーランドはさっそく歴史改変を阻止するため終りと始まりの書に向かって目を閉じた、巻物から光が漏れ彼を包みその時代へと転移させる。しかし転移している最中、ガーランドは強烈な力に引つ張られるのを感じた。

「な！これは一体？うわあああああああ！？」

ガーランドに起こった異常事態は時の巢にいる二人の界王神も把握していた、しかし後に残っていたのは歴史改変が起こっている巻物だけだった。

「ガーランド、そんな！」

「こっこれは一体どうなつとるんじゃ!？」

数時間前、超次元世界ゲームギョウ界

女神達が倒され三年後ギョウカイ墓場、ゲームギョウ界で使えなくなつたガラクタの山があふれるプラネテューヌから来た二人の女性がそこにいた。一人はアイエフ、もう一人はコンパ、犯罪組織マジエコンヌによってギョウカイ墓場に捕われた女神達を救出するため、二人はやって来たのだった。

「うう、こ、怖い所です・・・」

「もお、だから待つてなさいって言ったのに」

「待つてるだけなんて嫌です！私だって、ネプネプやギアちゃん、女神さん達を助けたいんです！」

犯罪組織によって、人々の信仰“シエア”が大量に奪われたことにより最悪の時代となっていた。信仰のない国は滅んでしまう、このままではゲイムギョウ界の全てが崩壊してしまう。この最悪の状況を打破するため、プラネテューヌの教祖イストワールは女神救出のためこの二人を送り込んだのだ。ちょうどその時、イストワールから通信が送られてきた。

『アイエフさん、コンパさん、首尾はいかがですか？』

「はいイストワール様。ギョウカイ墓場に到着しましたが、まだネプ子達は見つかりません。もっと奥へ行ってみます」

『お願いします。ネプテューヌさん達を助けだす事が出来れば、この最悪の状況を必ず打破できるはずです』

「そのためにも早く、ネプ子達を見つけないと」

「大丈夫です、そのために頑張つて“シエアクリスタル”を作つたんですからー」

信仰の力シエアを結晶化させたシエアクリスタル、これがあれば女神達を助ける事が出来る。イストワールの通信を切り、二人は奥へと走りだす。かなり奥まで行った所

でようやく見つけた、黒い触手のようなものに絡めとられた四人の女神と一人の女神候補生を。

「ネプ子! しつかりなさい!」

「う……」

「ねぶねぶ! ギアちゃん! 女神さん達! 目を覚ましてください!」

「……………」

駆け寄った二人が女神達に声をかける、しかし返事はなく帰って来たのは苦しむ声だけだった。アイエフはカタールを装着し拘束している触手を切ろうとするが全く通用しなかった、いらだちを感じたがこの状況をどうにかするためイストワールに通信を入れた。

「イストワール様! ネプ子達を見つきましたが意識がありません。どうしたらいいですか!?!」

『落ち着いてくださいアイエフさん、コンパさん、シエアクリスタルを使ってください。そうすればきつと……』

「は、はいです! 確か鞆の一番奥にしまって……」

「そうは……いかなぞおとおお!!」

アイエフ達の頭上から大きな黒い物体が降って来た、それは人型となり手にした戦斧

を振り回し叫んだ。

「ふ、ふははははははははは！ やつと来た、やつと来たか！ 三年間も、このジャツジ・ザ・ハード様をじいつと待たせたんだ、たつぷりと相手をしやがれえええええ！」

「もう、時間が惜しいって時に！ コンパ、私が時間を稼ぐから早くネプ子達を！」

「は、はいです！」

ジャツジ・ザ・ハードと名乗った黒い人型に向かっていくアイエフ、コンパはシエアクリスタルを靴から取り出しその輝きを女神達に当てた。

「……ううう……あ……こ、ここは？」

「ギアちゃん！ 大丈夫ですか？」

「コンパさん？ ……どうしてここに？ ……私、たしか」

最初に意識を取り戻したのは女神候補生ネプギア、触手を振り払い何とか立ち上がった。

「よし、このまま女神さん達も助けて」

「きやあつ!!」

コンパの言葉を遮ったのは吹き飛ばされたアイエフだった、体中に傷を負いながらも時間を稼ぐべく立ち上がろうとしていた。

「弱い……弱すぎる！ もっと……もっと俺を楽しませないかああああ!!」

「アイエフさん！あぶない！」

アイエフの頭上に戦斧が振り下ろされる、それを間一髪救ったのはネプギアだった。

「ネプギア！ごめん、助かったわ。でも気を付けて、あいつ、半端な強さじゃないわ」

「アイエフさんは休んでいて、今度は・・・私が戦います！・・・コンパさんはお姉ちゃん達を！」

「は、はいです！みなさんお願いです、早く目を覚ましてください・・・」

傷ついたアイエフに代わり、今度はネプギアが時間を稼ぐためジャツジ・ザ・ハードに立ち向かう。手にしたビームガンブレード“マルチプルビームランチャー”（M, P, B, L, ）を撃ち牽制する。

「貫いて！」

M, B, P, L, の最大出力のビームが直撃し大きな砂埃を上げた、次に姿を現したのはジャツジ・ザ・ハード無傷の姿だった。

「何なんだあ今のは？」

「そ、そんな!？」

「全然効いてないなんて・・・コンパ！ネプ子達は!？」

「そ、それがシエアクリスタルの光を当てても起きてくれないですう・・・」

「まさか、シエアクリスタルの力が足りない？けどこのままじゃ・・・」

「私、また負けちゃうの？やだ、そんなの・・・そうだ！あれを使つて」

「もういい、期待はずれだ。雑魚は雑魚らしく死ねえ！」

ジャツジ・ザ・ハードの戦斧が三人に向かつて振り降ろそうとした時、いつの間にかネプギアがコンパからシエアクリスタルを受け取り掲げた。開放した力は戦斧を受け止めジャツジ・ザ・ハードにその衝撃を返した。

「ぐあ！な、何だと!?まだそんな力が！」

「やつた！いいわよネプギア！」

しかしネプギアの持つシエアクリスタルに突如ヒビが入り七つの欠片に砕けてしまった。

「そんな、シエアクリスタルが!？」

「残念だったな。今度こそ終わりだ、死ねええ!!」

「もうだめ、このままじゃ・・・お願い、誰か、助けて！」

ジャツジ・ザ・ハードが再び攻撃の態勢に移りネプギアが心から祈ったその時、七つに砕けたシエアクリスタルがそれに答えるかのように光を放ち空へと飛んだ。七つの光は一つに集まり一人の男を召喚し消滅した。

「うん？うわあああああ!？」

突如空から現れ重力に従って落下し、非常にかっこ悪い姿を見せたのはゼノ世界で歴

史改変を阻止するため過去に転移しようとしたガーランドであった。
「か．．．かつこ悪い．．．」

奪還の女神候補生

「いててて、な、何だこことは!? 巻物で見た場所と違うぞ」

シエアクリスタルが消滅しかわりに現れたガーランド、あまりの状況に全員固まっていたが、意識を失ったネプギアが倒れた事により全てが再び動き出した。

「ギアちゃん!」

「ネプギア!? しっかりしなさい!」

「何が起こったのか知らんが、まずは貴様から死ねええええ!」

「おせえよ、超神撃拳!」

ジャツジ・ザ・ハードはガーランドを仕留めようと彼に向って戦斧を振り落とすが、ガーランドはすでにそこにはおらず、気を込めた拳でジャツジ・ザ・ハードの顔面を渾身の力で殴り吹き飛ばした。

「ぬぐああああああああ!」

「うそ、何あいつ強!」

「しかも、あの空を飛んでいるですう!」

突然現れた名も知らぬ男が自分たちでは敵わない敵を吹き飛ばした上に空を飛んで

いる事に戸惑うアイエフとコンパ、その二人の気配に気づきガーランドは声をかけた

「おい、お前ら。勢いで殴っちまったが、あれはお前らの知り合いか？てかここ何処だ？」

「はあ!?何言ってるのよあんた？あいつは敵だからあれでいいのよ」

「それよりお願いです！ギアちゃんを、女神さん達を助けてください！」

「は？ギアちゃん？女神さん達？」

「きいいいさああああああああ!!!」

混乱しているガーランド、そこへ殴り飛ばしたジャッジ・ザ・ハードが立ち上がり睨みつける。

「これだ！この強さだ!!強い奴と戦う、これこそ俺が求めていた戦いだ!!!さあもつとだ！もつと俺を楽しませろ!!!」

「おいおいマジかよ、全力で殴ったのにたいして効いてねえ」

「そんな!?どうすんのよ!このままじゃ!?!」

「ここ、こんな所で死にたくないですう〜」

「しようがないな、おいお前ら、ここはひとまず逃げるから目をつぶれ。俺がいいと言うまで目を開けるなよ」

「え？ちよつと!？」

「ぬうあああああ!!!」

「太陽拳!!!」

太陽のように強烈な光を放ち相手の目を眩ませる太陽拳、不意打ちすれば格上の相手にも通用するこの技でジャツジ・ザ・ハードの目を眩ませた。

「ぐわあああああ!?!目が！目があああ!?!」

「よし、お前ら、今のうちに逃げるぞ！悪いな脳筋デカブツ、次ぎに合うまで勝負はお預けだー!」

「く、まだネプ子達は助けられてないのに。でもシエアクリスタルは消えちゃったし・・・しようがないわね、コンパ、ネプギアを運ぶわよ!」

「ま、待つてくださいですう」

「ここまで来れば大丈夫そうね」

「はひい、はひい、助かったですう」

「・・・だめだ、全然応答しない」

あれからずいぶん走り、ジャツジ・ザ・ハードをまくことが出来たことを確認し、よ

うやく一息つける状況になり、ガーランドはスカウターの通信機能を使い、時の界王神達に連絡を取ろうとするが、スカウターは先ほどからノイズとレンズにはエラーの表示がされ全く通信できなかった。

「困ったなあ、落ちた時にどこか壊れたか？それにしてもここは一体どこだ？どう見ても地球じゃないよな」

「ねえ、あんた」

「ん？」

「ありがとね、この子を助けるの手伝ってくれて。自己紹介がまだだったわね、私はアイエフ、こっちはコンパよ」

「初めましてです、それとギアちゃんを助けてくれてありがとうございます」

「俺はガーランドだ、礼を言われるのはうれしいが、ここは一体どこなんだ？それにお前らが言っていたギアちゃんとか女神って言うのは？」

「私達もあんたにいろいろ聞きたいことがあるけど、今はプラネテューヌに戻りましょう。お互いのことを知るのはその後でってことで」

「・・・、まあいいか」

アイエフとコンパに連れられネプギアを運ぶガーランド、ギョウカイ墓場を脱出しようと歩き出す三人を見つめる一つの影が遠く離れたガラクタの山の上にあった。

「何故サイヤ人がここにいる？それにあの蒼い髪と瞳・・・奴を思い出す」

反省会 関わる世界編

ヤサイ人「はいという事で始めました。第一回超次元ゲームネプテューヌXENO VERSE mk2の反省会を始めます。司会は作者ヤサイ人とこの小説の主人公ガールランドでやっていきます」

ガールランド「あゝ、これを読んでくれる読者の皆様初めまして、でいいのか？それより何だ反省会って？」

ヤサイ人「まあ、反省会って言うよりお試し回って感じかもね」

ガールランド「あ？お試し？どういう意味だ？」

ヤサイ人「いやね、ちよつと気になる事があってね。ほら、今回文章なしの完全な会話式にしてるだろ？それと俺達のセリフの前に名前書いてあるでしょ？」

ガールランド「ああ、書いてるな」

ヤサイ人「本編では書いてないけど、これらってここではやっていいのかどうか分かんなくてね。他の作者様の小説は書いてあることがあるけどさ、取扱説明書を読んだんだけど書いてないんだよね。見落としてるだけかもしれないけど、だから今回はそれ自分の中ではつきりさせるために思い切ってこういう形にしてみたのさ、だから反省会

というよりお試し回になるかもってこと」

ガーランド「なるほど、それで、名前を書くのがいい場合とだめだった場合、どうするんだ？」

ヤサイ人「無論、いい場合はこのまま会話式さ。だめだった場合は警告だったり読んでいる人が教えてくれるだろうから修正か削除するかだな。まだわからないから今回はこのままでいくぞ」

ガーランド「そうかい、それで、反省会と言うが何をするんだ？」

ヤサイ人「この章を読んでくれた読者様の感想で俺が特に気になった所に答えたり、この章で目立った人をゲストに呼んでこの章の振り返りをやろうってところだな。まあ、今回はプロローグという事でゲストは呼んでいないけど」

ガーランド「ゲストの方はいないという事は、読者様の感想で何か気になる事があるのか？」

ヤサイ人「うん、一番気になったのはガーランドの名前なだけだね」

ガーランド「俺の名前？」

ヤサイ人「ある方の」ガーランドって名前は謀RPGの最後に混沌の神になるあのお方を思い出す”って言うのが何のことかなと思って調べてみたところ、FFのキャラの事らしいだね。俺、FFはやったことないから驚いたんだよ、一生懸命考えたガーラ

ンドの名前がFFにあったなんてさ」

ガーランド「なるほどな、ちなみに俺の名前は本家ドラゴンボールの純粋サイヤ人らしく、作者が野菜の名前から考えて響きが良かったものを採用したんだそうだ」

ヤサイ人「無論お前だけじゃないぞ、ガーランド」

ガーランド「そうだったな、俺の親父ターニップにお袋のロータスも野菜の名前から考えたんだ、この反省会の次はキャラと設定をのせるらしいから、読者様は俺達の名前の由来となった野菜を予想してみてくれ」

ヤサイ人「二つ目はヒロインなんだけど、これが困ってるんだよな。mk2本来の主人公のギアちゃんにしようか、この小説の流れで決めるか、これが本当に頭が痛くなるほど悩んでるんだよな」

ガーランド「どれを選ぼうとも後悔だけはするなよ？」

ヤサイ人「もちろん、そのつもりだ。後はこの小説のオリジナルの種族であり、ターニップとガーランドの種族であるサイヤ人ブルー族についてだが、これもキャラと設定に書くつもりだ」

ガーランド「まあ、サイヤ人であるという事は間違いないからそう言う理解でいいんじゃないか？」

ヤサイ人「そうかもね、さて今回の反省会はこれで終わりです。つまらない小説だけ

ど読んでくれてありがとうございます、では次の反省会で合いましょう。それではさようなら」

キャラと設定

ゼノ世界とは

ドラゴンボールの世界は名前がなく第7宇宙であることくらいしかないので、区別をつけやすくするためゲームの名前からとってゼノ世界と名付けました。DB世界でもいいような気がしますが、ゼノバースとは「知らない世界」「未知の領域」という意味があるのでこれでいいかと思いました。

サイヤ人ブルー族とは

純粹のサイヤ人の突然変異種であり、本来のサイヤ人は黒い髪と黒い瞳（トランクスのような混血は除く）だがブルー族は蒼い髪と蒼い瞳が特徴の稀少で少人数であるが、しっぽもあるし大猿にもなれるのでそれ以外の違いはない。しかし本来仲間であるサイヤ人からも忌み嫌われ、惑星ベジータでも惑星サダラでもない名もない星に追放された。この一族はかつて邪悪なサイヤ人達のやり方に反対し、反旗を翻した善良なサイヤ人の子孫であったが惑星ベジータがフリーザによって破壊されたと同時に、ある者にその惑星も壊滅させられサイヤ人ブルー族は絶滅したかに思われたが、ドラゴンボールに

よってターニツプがトキトキ都に召喚されたため絶滅だけは免れた。今のブルー族はターニツプとガーランドの二人のみである。

名前 ターニツプ 20歳↓40歳

種族 サイヤ人ブルー族

ドラゴンボールによってトキトキ都に召喚されたゼノバース1主人公でありサイヤ人ブルー族の唯一の生き残り、召喚された当時は下級戦士レベルの戦闘力であったが、数々の歴史改変での強敵や多くの師匠達との戦いで力を上げ超サイヤ人2までなる事ができるようになり、その力は破壊神ビルスにも注目を浴び稀に見る天才であると言われるほどに成長した(ターニツプは超サイヤ人2の状態でしかビルスと渡り合えないが、悟空はゴッドの世界を体に吸収したとはいえ超サイヤ人の状態で渡り合ったため、まだ悟空の方が上である)。今はコントン都ナンバー1となり先輩タイムパトローラーとして新人タイムパトローラーを育てている。息子であるガーランドにサイヤ人としての生き方を主に教え厳しいところがあるが、父親としてガーランドが早く強くなり自分に追いつく事を楽しみにしている。野菜の名前を言われると怒る。名前の由来の野菜はかぶの英語読み

名前 ロータス 18歳↓38歳

種族 サイヤ人

トキトキ都に住んでいる女サイヤ人、タイムパトローラーではあるが戦闘が不得意で主にトキトキ都の居酒屋で働いていた。そこで偶然ターニップと出会い付き合うようになる。付き合って一年後思い切って告白し彼と結ばれる。ガーランドを出産後タイムパトローラーを引退したが、元先輩タイムパトローラーとして、母として彼に優しさを主に教えた。おばさんと言うと怒る。名前の由来は蓮根の英語読み

名前 ガーランド 18歳

種族 サイヤ人ブルー族

トキトキ都の英雄である父ターニップと母ロータスとの間に生まれた二人目のサイヤ人ブルー族にしてゼノバース2主人公でありこの物語の主人公、父同様に稀に見る天才である片鱗を見せておりターニップの技を見ただけで殆どの技を体得している。ターニップからはプライド、ロータスからは優しさを受け継いでおり、サイヤ人としてのプライドとして、一対一は逃げずに死ぬまで戦う精神を持っているが仲間のためならプライドを捨てる覚悟もある。目標はコントン都で一番強くなる事であると同時に父を超

える事。野菜の名前を言われると怒る。ターニップと瓜二つである。名前の由来は春菊の英語読み

プラネテューヌ編

女神の起床

四つの国で技術力が高い プラネテューヌ プラネタワールの教会にて、奪還したネブギアをコンパに任せ、ようやくこの異常な状況を話し合う事が出来る状態となった ガーランドはアイエフに連れられた会議室でプラネテューヌの教祖イストワールと出会ってお互いを事を話していた。

「ではあなたは、このゲームギョウ界ではない異なる世界のから来たという事ですか？」
「ゲームギョウ界というのは聞いた事がないからな、それに来たくてこの世界に来たわけじゃない」

「歴史を守るタイムパトローラーね、それにしてもサイヤ人なんて種族、聞いたことないわね。どんな種族なのよ？」

「知らない方がいい、ただ戦闘民族という事だけ教えてやる」
「戦闘民族、だからあんなに強かったのね」

「戦闘民族という言葉にかすかに反応したイストワールは何か考えるかのように目を閉じた、」

少しして考えがまとまったのか口を開いた。

「ガーランドさんでしたね、あらためてネプギアさんを助けていただいてありがとうございます。ざいます。そして差し出がましいようですが、私たちにあなたのお力を貸してくれませんか？ 私達には、いいえ、このゲームギョウ界にはあなたのような強い人が必要なんです」

「・・・寝床」

「はい？」

「俺は俺のいた世界に帰る方法を探さなきゃならない、だがその方法を探すためにも右も左もわからないこの世界に留まらなきゃならない。食い物は自分で何とかするから寝床だけ提供してくれないか？ 無論、力を貸すだけじゃなく仕事もするからさ」

「・・・ではこうしましょう、あなたを用心棒として雇わせていただきます、その間はこのプラネタワールの一室をあなたの部屋としてお貸しし、それと必要最低限の衣食住をお約束します」

「OKだ、話が早くて助かる。まだ色々話を聞きたい所だが、それはあの女神様とやらが起きてからにしよう」

「わかりました。ではアイエフさん、この部屋にガーランドさんを案内してあげてください」

「はい、じゃあついて来て」

アイエフに連れられガーランドは会議室を後にした、部屋に残ったイストワールの元にプラネテユーンの警備兵が入って来た。

「イストワール様、あの男、簡単に信用していいのですか？もしかしたら犯罪組織のスパイかもしれません」

「疑う気持ちはわかりますが、あの人はネプギアさんを助けてくれました。それに……あの人の目は確かな温かみを含めています。信じましょう、今の私達にはそれしかできません」

「……は、私の部屋？私たしかギョウカイ墓場で……」

あれから数日後、自室に運ばれ眠り続けていたネプギアはようやく目を覚ました。ベッドから身を起しあたりを見渡しているとコンパが入って来た。

「ギアちゃん！よかったです、起きてても大丈夫ですか？」

「コンパさん、心配掛けてごめんなさい」

目を覚ましたネプギアに気づきコンパが駆け寄り喜びの声を上げた、ネプギアは自分を心配してくれたコンパに笑みを返した。

「ギアちゃんが目を覚まして本当によかったです。これもあの人のおかげです」
「あの人って誰ですか？」

「ついて来てください、合わせてあげるです」

コンパに連れられてやって来たのはガーランドが借りている個室、ノックをして入るとスカウターの修理をしている難しい顔をしたガーランドの姿があった。

「ガーランドさん、ギアちゃんが起きたので連れてきました」

「ん？そうか、あんたがこの国の女神の妹でいいのか？」

「は、はい。初めまして、私、ネプギアって言います、コンパさんから聞きました、助けてくれてありがとうございます」

「気にするな、それよりお前……」

「な、何ですか？」

修理を中断し、近づいてきて長身を折ってまじまじと見てくるガーランドに驚くネプギア。小さく「はわわ」とつぶやきながら両手を前にし、顔を隠す何かを勘違いをしているコンパに気にせずガーランドはある事を思い出した。

「もしかして、お前が俺を呼んだのか？」

「え？呼んだ……ですか？」

「ああ、確か、お願い、誰か助けて」って声が聞こえた、あれはお前の声じゃないのか？」

「!!」

その言葉でネプギアは思い出した、シエアクリスタルが割れ、その欠片が答えるかのよう集まりガーランドが現れたところで気を失った事を。

「あなたが、私に答えてくれたんですか？」

「悪いが俺は来たくてこの世界に来たわけじゃない、ただの予期せぬ事態だ。まあ、帰る方法が見つかるまで用心棒としてここに住まわせてもらう事になったがな。それまではよろしく頼む、ネプギア」

「はい、よろしくお願いますガーランドさん」

手を出し合い握手しお互いのあいさつをすませ、ネプギアが起きた事をイストワール達に伝えるため三人は会議室へと向かった。しかしこの時まだ誰も知らない、これからこのゲームギョウ界の本来の歴史の流れと全く異なる壮絶なる戦いが始まることを。

現状報告、打開策

会議室にて、目覚めたネプギアを加え、この三年前に何が起こったのかを話していた。プラネテューヌ、ラストイション、ルウィー、リンボックス、四女神がたった一人の敵の前に敗れ去り捕われた事、女神を失った人々はマジエコンを通じて犯罪組織を信仰し女神達への信仰はほとんどなくなっている事、このままではゲームギョウ界は犯罪組織の犯罪神と呼ばれる存在によって崩壊の道を辿っている事、今の現状はまさに絶望であつた。

「それでイストワール、俺達はこれからどうするんだ？」

「確かに、今の状況は絶望的ですがまだ手はあります。私達にはネプギアさんの他にラストイション、ルウィーには女神候補生がいます。彼女達に協力を得られれば、より効率良くシエアを回復することが出来るはずです。」

「私以外の女神の妹が？」

「各国にも事情があり、協力を得ることは難しいかもしれませんが。しかし、彼女達も自分の姉を助けたいという気持ちは同じはずです。それともう一つ、ゲームキャラの力を借りるのです」

「ゲームキャラって何ですか？」

「古の女神達が生み出した世界の秩序と循環を司る存在です。彼女達は各国の土地に宿り、その土地に繁栄をもたらし続ける。そして有事の際はその時代の女神を助け、悪を滅ぼすだけの力を秘めている……」

何やら都合の良い存在だがというツツコミが聞こえそうだが、その存在を頼らなければならぬのは誰にも分かった。

「プラネテューヌのゲームキャラの行方はまだわかりませんが、情報が入り次第お伝えしますので、皆さんはその間にプラネテューヌのシエアの回復をお願いできますか？」

「わかりました、それじゃあ皆クエストを受けにギルドに行きましょう」

プラネタワーを出て街中を歩きギルドに向かう最中、ガーランドは街並みを見てつぶやいた。

「初めて来た時はネプギアを運んでたからよく見てなかったが、この街、近未来都市って感じだな」

「プラネテューヌは革新する紫の大地と言つて、他の国より新しい技術の開発が進んでいる事からこう呼ばれているのよ」

「へえ、俺の世界と少し似ている気がするが、スカイカーやフロート、ジェットフライ

ヤーみたいなた化した乗り物がない所を見ると俺の世界の方が技術力は上だな」

「そういえば、ガーランドさんのメガネも通信機がついてて便利そうでしたね」

「メガネ?・・・スカウターの事か?あれはメガネじゃないぞ、相手の強さを測る機械だ」
「相手の強さですか?」

「スイッチを押すと相手の距離や強さの数字をレンズに出してくれる優れ物だ、今は壊れて使えないから部屋に置いて来た、今以上に壊れても困るしな」

しゃべり終えた絶妙なタイミングでクエストを提供するギルドに着き、さっそく何かクエストがないか取り繕うとしたが、そこには従業員らしき人はいなかった。

「誰もいない?」

「依頼も二つしかない、えっと・・・」

アイエフが掲示板を操作し、モニターに表示されていたクエストの内容は以下の通り
依頼内容

バーチャフォレストに出没するスライヌの撃破

最近、旅人が大量発生したスライヌの群れに襲われ被害増大、解決求める

依頼内容

バーチャフォレストに出没する謎のモンスターの撃破

最近、バーチャフォレストに現れた人型未確認モンスターが確認された、危険種レベ

ルではなく、数も少ないがそれは警備隊では手に負えぬ強さを持っている、至急討伐求めらる

「スライヌ？何だそれ？」

「モンスターの名前よ、うん、これくらいなら丁度いいしこの二つを受けましょう」

「場所も近いですし、スライヌさんも強くないです」

「でも、もう一つの謎のモンスターって大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だって、さあ、行くわよ」

謎のモンスターと言うネプギアの心配をよそに、女神一行はバーチャフォレストへ向かう事になった。

リハビリ、遭遇

緑が生い茂るバーチャフォレストに到着した女神一行は、ほどなく歩いた所でお目当ての犬のような耳と尻尾が生えたスライム、スライヌの群れを発見した。

「あ、いたいた。あれが討伐対象のスライヌよってあら？ ガーランドは？」

「あそこでスライヌさんとおしゃべりしてるです」

「なあお前、この辺で変わったモンスターを見なかったか？」

「ヌラー?!」

コンパが指をさした方向にはスライヌの尻尾をつかみ上げ、観察しながら話しかけるガーランドの姿があった、だがそのせいでこちらに気づいていないスライヌまで気づいてしまった。

「何やってんのよ!?! スライヌが喋る訳ないでしょ!」

「ん? この世界の動物は喋らないのか? 俺の世界では犬とか猫とか喋る動物がいるぞ」

「あんたの世界と一緒にするんじゃない! それより、このクエストはあくまでネプギアのリハビリもかねてるんだから強いと分かっているあんたは戦っちゃだめよ」

「え、つまんねえ(ん?・・・近くに気を感じる?)」

「まったく、こつちがピンチになった時に助けてくれればいいんだから楽なもんじゃない。ネプギア、コンパ、行くわよ！」

「はいです！」

「・・・」

カタール、注射器と自分の武器を取り出し戦闘体制に入るアイエフとコンパだが、ネプギアは武器を取り出さずうつむき黙ったままだった。

「どうしたネプギア？戦わないのか？」

「・・・あ、は、はい!?行きます！」

「さあ、始めるわよ！」

急かされネプギアもビームソードを取り出しスライヌに向かっていた、強くないと分かっていたスライヌ達はネプギア達の連携に倒されていき、残りは後八匹となった。

「へえ、みんな少しはいい動きが出来るな」

「よし、後はこいつらで終りね」

「又、ヌラ、ヌラー！」

「ヌラヌラー！」

「ヌララ！」

おや、スライヌ達が・・・!?

「ぬーらーらー!!」

な・・・なんとスライ又達が・・・!? スライ又達がどんどん合体してビッグスライ又になってしまった!

「合体した!?!」

「でかいわね、こいつは骨が折れそ（ブバツ!）え?」

アイエフがビッグスライ又の感想を言い終えようとした時、何処からかビッグスライ又に向かって液体が放出された。

「ぬ、ぬーらあああ・・・」

液体がかかったビッグスライ又は見る見るうちに残骸残さず溶けてしまった、液体が放出された方向を向くと、外見は一緒だがピンク、灰、緑色の三体の人型モンスターが現れた。

「グエ・・・」

「ギ・・・」

「ギギギ・・・」

「何よこいつら。もしかして、こいつらが未確認モンスター!?!」

「気持ち悪いですう」

突然の出来事に驚く三人、だがガーランドは知っている、この三匹のモンスターの名

を。

「・・・テンネンマンにジンコウマン、それに栽培マンだと?」

「え? ガーランドさん、あのモンスターを知ってるんですか!」

「俺の世界のある組織が使っているインスタント戦士だ。ネプギア、アイエフ、コンパ、油断するな! 特に緑の栽培マンには注意しろ!」

「油断できない相手って訳ね。そうだ、ネプギア、あんた変身してやつつけちゃいなさいよ」

「へ、変身?」

「女神化の事よ、変身すればあんな奴ら楽勝でしょ」

「変身・・・うう」

変身という言葉に過剰に反応したネプギアは手にしていたビームサーベルを地面に落とす、自分の体を抱き震えだした。

「ネプギア? どうした?」

「ダメ、怖い・・・来ないで・・・」

「「キエーローツ!」」

「ギアちゃん! あぶないです!」

頭を振り目に涙を貯め戦意が失ったネプギアに栽培マン達がこれ見よがしに襲いか

かった、そこへガーランドが割って入った。

「ギ?!」

「ピンチになったから俺も戦っていいんだろ? 来いよ」

「グエ!? キエキエー!」

「ふん、つあ!」

軽い挑発に最初にのったテンネンマンに掌底を叩き込み、さらにエネルギー波で撃ち抜いた。

「狼牙風風拳! はい! はい! はい! はい! はい! はい! はい! はい! はい!」

次のジンコウマンは狼の牙を模す鋭い連撃を叩き込み、両手の掌底を打ちこみとどめをさした。

「ギッ! (ブバツ!)」

残った栽培マンも負けずと頭から溶解液を飛ばすが、ガーランドはそれをかわし懐に潜り込んだ。

「排球拳! いくわよ! ♡はい! ワーン! ツー! アター! ック!」

性格が豹変したかのような高い声を出し、栽培マンをバレーボールのように高く打ち上げ地面に叩きつけた。

「もう終わりか? つまんねえ」

「な、なんか途中が変だったけど、やつぱりあんたすごいわね。それよりネプギアあんな……」

「あ！アイエフ!? うかつに近寄るな！」

「ギエ！」

「え? うわ!?!」

アイエフがネプギアに近づこうと地面に埋まった栽培マンの側を通ろうとした時、死んだふりをしていた栽培マンが起き上がり、アイエフへ抱きつこうと飛びかかった。しかし組みつこうとした腕をガーランドが掴み取り阻止した。

「無駄なあがきだ、砕け散れ！」

栽培マンの最後の抵抗は空しく終わり、上空に打ち上げた栽培マンに向かって指を二本向け、気の爆発を起こし栽培マンを粉々に爆死させた。

「ふん、汚ねえ花火だ」

「ごめん助かったわ」

「ギアちゃん、大丈夫ですか？」

「ご、ごめんなさい、私……」

「……ま、これでクエスト達成だしギルドに戻るわよ」

手を貸しただけかに震えるネプギアを立たせ、女神一行はプラネテューヌへと戻つ

た。

一時の休息

バーチャフォレストで達成した依頼を報告する為、女神一行はプラネテューヌのギルドへ戻った。

「送信と、これでクエストは終わりよ。二人ともちゃんと覚えた？」

「はい、ギルドで依頼を受けて、それをこなして、最後にまた報告すればいいんですね」
「俺も覚えたぞ。まだクエストするのか？」

「今は他に依頼がないし、しかたない教会に戻りましょう」

今できる事がなくなってしまう、出来ない教会に戻ることにした、会議室に入るとイストワールがゲームキャラの情報の山に頭を悩ませていたが、クエストの成功を伝えると少しホツとした表情を浮かべた。

「それは良かった、こちらもゲームキャラの居場所までもう一息といったところですよ」

「明日には新しいクエストが配信されると思います、早くネプギアに本調子に戻ってもらわないとね」

ネプギアは申し訳なさそうに頭を下げるが、皆から気にしてないと言われ少し笑顔を

見せた。

「皆すまん、イストワールに話がある。二人にしてくれないか？」

ガーランドの申し出に少し戸惑いを見せたが、三人共了解してくれ会議室を出ていき
ガーランドとイストワールのみとなった。

「何でしょうか？」

「ネプギアは・・・いや、女神というのは変身できる種族なのか？」

「はい、守護女神である各国の四女神、そして女神候補生は変身することができます」

「だが、クエストの時ネプギアはその変身を怖がった。何か心当たりはあるか？」

「・・・おそらく三年前の事がトラウマになっているのでしよう。自分の姉含む女神達を
助ける事が出来なかった事、自分の力が通用しなかった事、それがネプギアさんの心に
大きな傷を残した」

「なるほど、それともう一つ、ゲームギョウ界に俺の世界のモンスターが現れた」

「あなたの世界の！本当ですか!？」

「間違いない。弱い奴らだったからよかつたが、もし未確認モンスターが現れたら俺に
知らせてくれ。奴らの系統だったらこの世界の奴じや犠牲者が増える」

「分かりました、皆さんにもお知らせしておきます」

「話はそれだけだ、ありがとうよ」

「いいえ、それではまた明日クエストの方をお願いします」

話し終えたガーランドは会議室を後にした。

「ふう、それにしても何故栽培マン達がこの世界にいる？わからん」

あれから数時間後、夜となりガーランドはもう少してこの一日が終わろうとしているのを自室でスカウターの修理で待っていると扉を叩く音が聞こえてきた。入るように言うが入って来たのはネプギアだった。

「何か用か？」

「えっと、クエストの時に助けてもらってちゃんとお礼を言っただけだと思って」

「ピンチの時に助けるのは用心棒として当たり前だろ、気にするな」

「はい・・・あの、ガーランドさんはどうして戦っているんですか？」

「あ？どうしてって？」

「あんなモンスターがいるんだからあなたの世界はゲームギョウ界より危険なんですよね、それなのにどうして戦えるんですか？」

その問いかけにガーランドは、修理の手を止め鼻で笑いすぐに答えを出した。

「簡単な事だ、サイヤ人は戦闘を好む種族だからだ。強い奴と戦うのは血が騒ぐし、逃げ

るよりは戦って死んだ方がましと考えるのが当たり前だ」

「それだけ・・・ですか？」

「俺にとつてはそれだけだ。ほかの種族はそうでもないかも知れないがな」

「・・・あはは」

少し面食らったネプギアだが、答えを聞いて笑みをこぼした。

「何故笑う？」

「いえ、ただ少しだけ、あなたの秘密に触れたような気がしたんです」

「秘密ね、そういうネプギアはどうなんだ？」

「わ、私ですか!？」

「俺の世界にも神様はいるが、戦う事はしないからな。何故ネプギアは戦うのか聞いてもいいだろ？お前も聞いてきたんだしな」

ネプギアは少し考え、自分の戦う理由を答えた。

「私はお姉ちゃんを・・・お姉ちゃん達を助けたい。そして、犯罪組織からゲームギョウ界を守りたいんです。プラネテューヌの女神として」

その問いに答えるネプギアの瞳には強い意志があった、答えを聞いたガーランドは笑いながらネプギアの頭を叩くように撫でた。

「じゃあ早く女神化とやらが出来るようにしないと、女神化できない女神なんて笑い

ものだぞ」

「うう、そうですけど笑う事ないじゃないですか」

その後二人は互いに笑い合い、話し終えたネプギアは自分の部屋へ戻りガーランドは明日に備えて眠る事にしベッドへ倒れ込んだ。

次の日、女神一行はギルドで新たに出品されたクエストを受け再びバーチャフォレストでモンスターと戦っていた。途中カイワレマンやキュウコンマンと新たなゼノ世界のモンスターが現れたが、最初の栽培マン達よりも弱い事もあり、クエストをこなして強くなったネプギア達の敵ではなかった。

「これでさつきまで受けた依頼は達成だな。これからどうする?」

「今は他に依頼がないですよ?」

どうしようという空気の中、ネプギアの方からピピピと音が鳴り響いた。

「何の音だ?」

「これです、Nギアって言っていーすんさんが持たせてくれた万能デバイスで通信機能があります」

取り出したNギアのスイッチを押すとイストワールの声が聞こえてきた。

『みなさん、今よろしいですか?』

「はい、今クエストをやり終えたところなんです」

『それは丁度よかった。たつた今、ゲームキャラの居場所が分かったんです!』
「本当ですか?どこにいるですか?」

『バーチャフォレストの最奥です。そこで眠りについているとの事です』

「やっとなお初めの一歩つて所ね」

「この森の奥か、しかし・・・(何だかすげー気を感じる?)」

最深部から感じられる気にガールランドは何やら嫌な胸騒ぎを抱きながら、女神一行はバーチャフォレストの奥へと進んだ。ゲームギョウ界の最後の希望ゲームキャラを見つげるために。

HOPE、ゲームキャラ

イストワールからゲームキャラの居場所を聞いた女神一行は、ゲームキャラを探すため巨大な木々が生えるバーチャフォレストの最深部へと到着した。

「ここに、ゲームキャラが・・・」

「この世界は地球と似て自然豊かだな。しかしどこから探すか」

「そればかりは片っ端から探すしかないでしょうね」

「早く見つかるといいですけど」

探索を開始し歩み始めようとした時、目の前に現れた黄色いチューリップ型モンスター数体が突然謎の光の包まれた。光が消えそこには黄色ではなく黒く染まったモンスターが現れた。

「モンスターが・・・!?」

「やっぱりね・・・」

「知っているのか? アイエフ」

「モンスターはね、犯罪神の信仰の力に影響を受けやすいのよ。で、強く影響を受けてしまったモンスターはあんな風に凶暴化するの」

「私達はあれを『汚染』って呼んでるです」

突如起こった事にアイエフとコンパが詳しく説明した。そんな中、汚染されたモンスターがこちらに気づいたのか襲いかかって来た。

「汚染前と汚染後じゃ、強さも段違いよ。油断しないで！」

アイエフの注意と共に女神一行と汚染モンスター達は戦闘を開始した。忠告通り汚染モンスターは通常のモンスターよりも高い戦闘能力を有し素早い動きとパワーを発揮したが女神一行は攻撃をやり過ぎし反撃した。

「一閃！」

「えいですー！」

「やあー！」

「多林連撃！」

ネプギア達三人の連携攻撃で一匹づつ確実に倒していき、ガールランドも持ち前のパワーによる空中連撃で仕留めていく。しかし、戦いの騒動に気づいたモンスターが新たな汚染モンスターの汚染に感染され新たにその数を増やしていく様子を見てアイエフが焦りだした。

「く、やばいわね」

「何を慌てるんだ？」

「そりやそうよ！確かこの区域には・・・!?」

アイエフが何かを見つけ口元が急に止まり、その目線の先を見るとそこには巨大な狼型のモンスターが牙をむいていた。

「まずい、フェンリルに見つかった！」

「え！危険種!?!」

「でけえ！何だありや!?!」

「モンスターには危険種と呼ばれる非常に強力なモンスターがいるのよ、逃げるわよ！」

今の私達じゃ勝てないわ！」

「きゃん！」

今は勝てないと判断し逃げようとしたコンパが転んでしまい、フェンリルはそれに気付き跳びかかり前足がコンパの体を押さえつけた。

「わ、私は食べてもおいしくくないです〜」

「コンパさん！」

「コンパ!?!」

「待てアイエフ！お前じゃ無理だ！俺が行く！」

コンパを助けようと踵を返そうとするアイエフの代わりにガーランドが向かうが、フェンリルは今にもコンパの上半身を一噛みで食いちぎりそうな大口を開けた。

「駄目だ！間に合わない！」

「ひっ！」

「コンパーーーーー！」

コンパは今にも喰いつこうとしているフェンリルの迫りくる恐怖に目を閉じた。ネブギアも言葉が出ず両手で目を隠しアイエフの悲鳴が響き、フェンリルの上顎が振り降りされたその時。

「界王拳!!!」

突如ガーランドが赤いオーラを纏い、急激なスピードで近づき強烈な両拳を叩きこみ、フェンリルをコンパから引き剥がした。

「「!?!」」

「消えろ！かめはめ波!!」

三人が突然の出来事に驚きと待っている間に、殴り飛ばしたフェンリルに界王拳の力がこもったかめはめ波を撃ち込みとどめを刺し界王拳を解いた。

「大丈夫か？」

「コンパ！無事でよかった」

「こ、怖かったです」

コンパは自分が助かったという認識から目に涙を貯めアイエフに抱きつきアイエフ

も抱き返した、二人の様子を見ていたガーランドにネプギアが口を開いた。

「ガーランドさん、今の何ですか？何だか急に強くなったように見えましたけど」

「あれか？界王拳と言ってるな。体中の全ての気をコントロールして瞬間的に増幅させるんだ。これを使えば力、スピード、破壊力、防御力が全部何倍にもなる今の俺の切り札だ」

「あんなに強いのにまだ強くなれるですか!？」

「じゃあ最初から使いなさいよ」

「悪いがそうはいかない、この技は体力をぐっすりもっていく諸刃の剣だ。今の俺じゃパワーを上げすぎたら俺の体がぶっ壊れてしまうんだ」

「本当に奥の手って事なんですね」

「さあ、やっとモンスターがいなくなっただし、改めて探索を開始しましょう」

危険種モンスターを退け、女神一行はゲームキャラを探しに奥へと歩きだした。

「強い、あのパワー・・・まさかあのガキ・・・サイヤ人！」

犯罪組織の刺客と異変

「うん？なんか広い所に出たな」

「あ、そこじゃない？なんかそれっぽいのがあるわ！」

「はいっ！・・・あれ？何か聞こえるです？」

ゲームキャラを求めバーチャフォレスト最深部を探索し、何時しか神秘的な雰囲気漂う何かありそうな木々が広がった場所へと辿り着いた。しかしそこからは何かを壊そうとする音が鳴り響いていた。

「何か、壊そうとしているような・・・ダ、駄目！やめてください！」

「ああ？邪魔すんじゃないよ。誰だテメエら!？」

ネプギアの叫びにその人物は苛立ちながら振り返った、それは緑髪に鼠色の肌、鼠のようなパーカーを着用し、手には鉄パイプを持った非常にペたんこな少女だった。

「こっちの台詞です！ゲームキャラさんを一体どうする気なんですか!？」

「消すに決まってるだろ？こいつあ、我々マジエコンヌにとって、目障りな存在だからな」

マジエコンヌの名を聞いてアイエフが反応した。

「アンタ、マジエコンヌの一味なの？」

「へっ、教えてやる義理はネエが・まあいい、耳かっぼじってよく聞きな！犯罪組織マジエコンヌが誇るマジパネエ構成員、リンダ様たア・・・」

「構成員？てことは下っ端？」

「下っ端ですね」

「下っ端さんです」

「いや、下っ端以下の雑魚だろ？」

リンダと名乗ったのに下っ端の言葉を最後まで聞かずに、女神一行の思い思いの言葉に下っ端は怒り、耳まで真っ赤に染まった。

「なっ・・・!?!?誰が下っ端だあ!?!?誰が!?!?それにその蒼いの、誰が雑魚だあ!?!」

「うるさいわよ、下っ端のくせに。ほら、さっさとそこを退きなさい。下っ端のくせに生意気よ」

「下っ端さん、お願いですから邪魔をしないでほしいです」

「下っ端が相手なら、勝てるかもしれない・・・」

「雑魚なんて無駄な戦いになるのは目に見えている。さっさと自分の家に帰ってミルクでも飲んでろ」

「ぬ、ぐ・・・どいつもこいつも下っ端下っ端連呼しやがって・・・」

顔を下に向け怒りに顔を歪ませを拳を震わせて怒る下つ端。その時、下つ端の体が黒いオーラに包まれ目が赤くなり空へ飛んだ。

「え！何が起こったんですか!?!」

「下つ端さんも空を飛べるんですか!?!」

「汚染!?!でも人間が汚染されるなんて聞いたことないわよ!?!犯罪神の信仰が高いとこんな事も起きるの!?!」

「違う！これは、まさか・・・」

「もうガマンできネエ！下つ端呼びわりの事、後悔させてやる！まずはお前、その綺麗な顔をふっ飛ばしてやる！うらあ！」

下つ端と連呼され下つ端の体はわなわなと震え、ついに堪忍袋の尾が切れた下つ端は空を飛ぶのをやめ、最後の下つ端と呼んだコンパに向かって手を向け気功波を放った。

「ひゃあん！」

「間違いない、これは俺の世界の歴史改変現象 “凶悪化” だと!?!」

「ははは！何か知らねーが、スゲー力が漲って来らあ！次はアタイを雑魚呼びわりの蒼いの、テメエだあ！」

雑魚呼びわりのガーランドに鉄パイプを振り下ろした。が、その鉄パイプはガーランドの額に直撃したと同時にあらぬ方向へと折れまがった。

「な!？」

「いくら凶悪化したって、俺の世界じゃ武器に頼る奴は大抵雑魚でやられ役なんだぜ？」

「テ、テメエ、一体何者だ!？」

「俺は、ただの・・・サイヤ人だ」

「サ、サイヤ人だあ!？」

「覚悟はいいな？」

額から血を流すが、ガーランドは痛がる素ぶりも見せずそれを拭い下つ端を追って空を飛び容赦無しの拳を打ち込んだ。拳は下つ端の鳩尾に決まり下つ端は腹部を抱え、ガーランドはそのまま両拳を振り下ろし地面に叩きつけた。砂埃が晴れ次に現れた下つ端の黒いオーラが消え目に色が元に戻った。

「う、うげええ!？」

「あんた女相手でも容赦ないわね」

「俺は親父から女には優しくするように教えられてるが、敵なら話は別なんぞな」

ガーランドは苦しむ下つ端を尻目に、アイエフと共に先ほど下つ端が鉄パイプを振るっていたゲームキャラが安置されているであろう台座へと近づいたその時。

「きゃああああつ!」

「な!？」

突然の悲鳴に後ろを振り向くと、そこには地面に倒れているコンパの体を踏みつけ、ネプギアのセーラー服の襟首を持ち上げ、首を絞める男がいた。しかしガーランドはその男の姿を見て驚いた。

「ううっ！」

「何故だ！何故この世界に俺以外のサイヤ人がいる!?!」

「ほお、そうか。お前がこの世界に現れたといサイヤ人か、しかもブルー族とはな」

「遅えよ、何してたんだよ!?!ターレスの旦那！」

スカウターを付けサイヤ人の証である尻尾を腰に巻きつけた姿、孫悟空に似て異なる肌黒い男、別の歴史のゼノ世界で宇宙を暴れまわるならず者集団、クラッシャー軍団の首領、ターレス。